今度は椅子を突き動かす。

『はゝゝゝ云ふよ今云ふよ』

と語る。

矢嶋は勸める銀行の往復に大川を渡る、或時船の中から何心なく土堤を見ると、若葉の櫻の下を小供を連れて逍遙する男の姿が榊直也に實に能く似て居た、が其時はそれ限であつた、五六日經つた日曜日の朝例の如く土堤を散歩して佐藤男爵の別莊の門前を通ると、其家の二階の欄干に凭れて居たのは今度こそは紛れもなく榊直也其人であつた……と云ひ得る程確に認めたのであるがあの特徴の髯は無つた、聲をかけやうかと思つた時佇立る人を氣取たか彼は忽ち坐敷へ入つた。

『髯は生ねた物だから剃落される、彼人が榊直也でなかつたら我輩この鋼鐵縁の眼鏡を叩き割つて盲目になつて見せる』

矢嶋の話は人々に妙に疑惑を抱かせた、佐藤男爵の別莊といふ事と、何時か新聞に載つた男爵令嬢の記事……それを一つにして考へずには居られぬ話である。

（五〇）

別莊の門内に美しい馬車が入つてから小半日は經つた、逞い鹿毛の嘶が日光にキラキラする青葉蔭れに時々高く聞ねた。

喜代子が巽伯の令嬢雛子を連れて此別莊に直也の朱衣を訪れるのは今日で二度目である、薫の手が離れる樣になつてから彼は雛子姫で儒ける件に力を入れたのである、朱衣を悪黨と知つて味方と賴んだ後は雛子の普通に足らぬは低能である事はモウ隱すに足らぬことで、朱衣は何も彼も能く知つて居る、唯両人が巧く共謀になつて一個の戀に足らはぬ分別を一層鈍くして居る雛子から利益を獲得れば此方の仕事は成就するのであると思つた、喜代子はこれに向つて今全力を注いで居るのである。

雛子は庭園を歩いて居る、其姿の見ねる座敷の椽先で直也と喜代子は密々と雛子の事を私語いた、それが自分に取つて嬉しい耻かしい事と合點して時々見ぬ樣にして両人を見る雛子の顔は赤い、度の高い眼鏡が綠の木下蔭でチラ〳〵と動く度に喜代子はそれを迎へて『ねえ貴女』とい

ふやうな表情をする、口は露骨に穢い。

『あれで默つて居て唯嬉しいのね、あの顏を御覽なさいよ、目も鼻も溶けかゝつて居るから』

『はッは、、、始めから解けて了つてる顏だ……喜代子さん、貴女の爲る事は却々深酷に出來てるですなア』

『ほ、ほ何故……何が深酷？』

『大野氏を自分の物になさつた手腕は別としてだ、物も有うに彼の馬鹿な令孃を籠絡して戀を吹込むなざア迚も平凡な聯想の及ぶ所ぢや無い、僕實際敬服して居るですよ』

『ほ、ほあんな事を……何だか妾大變な惡黨に聞えるわねゝ、妾貴方にモウ隱しはしないから雛子さんが貴方に戀をしたのは全く自分單獨の發作よ、ほ、ほ思ひ付も訝しいけれど、實際貴方惚れられたのよ』

『巧い事を云ふですな……がそれを知る事も不可能な代物を資本にして續り取るのだからいよ〳〵貴女は豪い、優に僕の先輩だ』

『厭よ神木さん、妾なんか何して貴方に及ぶものですか、妾貴方に仕込まれてるのよ今は、あの子供だつて』

と云つて喜代子は二階の方を指した、薫は二階に居る。

『子供の所置でも妾なんか知らない事を……そんな秘密の事なぞ妾些とも知らなかつたから』

『ほ、、、それは今迄にそれを知る必要が生じなかつたからだ、貴女が無暗に子供を作らんからちや、がこれからは貴女も好い華主になるだらうはッはゝはゝ』

『何故』

『何故ッてそれは說明の限りにあらずです』

『ほ、ほ、、、彼件何時運ぶの、妾彼の子供を片附けて了はないと……』

『可しい、モう直です、申込んであるのですからな、何しろ取引が多いから前から前からと所置して行くのですな……貴夫人の腹から飛出した俳優の子も居る、令孃が生んだ敎師の御落胤もあらうといふものだ、結婚前に生まなければならない爲に大きいのを抱へて出張する處女もあれば切髮の伸びかゝつた未亡人が乳房を含ませて出掛るのもあるです、それを一々取引するのだから區役所の戸籍係より遙が忙がしい商賣ですよ』

『眞逆そんなほ、ほ、、、』

『嘘と思ふですか、嘘と思はれなければ出來る營業ぢやないはゝ、、、』

『それで全く秘密が保てませうね、其點は大丈夫でせうね』

「貴女は兎も角僕の安全の爲に秘密でなけれァ可けないぢやありませんか」

朱衣の云ふ所に依ると、一切の罪惡の子を絶對秘密に引請ける所がある、極めて巧妙な方法の下に行はれて一種の商取引である、其處に委托料と共に引渡した小供は何時とはなしに姿を掻消す……因果の小さな姿に絡まつた一切の罪惡と共に此世に存在せぬ事になるといふのである其處へ薫を引渡して了ひ、父の廣之は喜代子が出鱈目に云つた同族の貰ひ人へ子供の將來好かるべき條件で遣つたといふ事で欺くといふ相談が両人の間に出來て居る、喜代子は其解決を促すのであつた。

(五一)

喜代子は雛子の手をとつて靜かに坐敷を出る、日の沒りに逼らるゝ邸への時刻を雛子は恨めしげに呟いた。

『ねゝ今度何時連れて來るの、え喜代子さん、喜代子さんてばッ』

『ね、何、何を仰有つたの』

喜代子は二階で薫を何事か大きい聲で罵る朱衣の方へ氣を奪られて居た、劇しく手を振り動かされて。

『ほゝほ雛子様、貴女永らく辛抱して下すつたら、神木さん略承諾してよ、貴女との結婚を承諾して下つたのよ』

『ね、神木さん……』

『ですからね、モウこれからはお父様のお許しさへ出れば何時でも結婚の式が擧げられますからね、妾これからはお母様と両人でお父様のお許しが出る樣にそれにかゝりますわ、貴女お嬉しいでせう』

『……』

默つて俯向いて居る雛子の顏を覗き込んで。

『貴女嬉しくは無くッて?』

『……嬉しいわ……』

『嬉しいでせう、お父樣さへお許しが出たら貴女モウ彼な豪い小說家の奥樣だわ、神木令夫人

よ』

『喜代子さん、妾心配だわ、大變な心配が出來たわ』

左も思ひに惱む風情で雛子は突然に斯云つた。

『何、何な事、妾に仰有いよ』

『あの結婚したら旅行するのね、新婚旅行をするのだわね』

『ほゝほそれはねえ……貴女は心配ッて何？』

『妾新婚旅行が心配だわ、妾あれ小説で讀んで知つてるもの、恐いわ』

と何物か我に襲ひかゝるのを防ぐやうに長い袂を重ねて胸を覆ふ。

『新婚旅行は一番樂しいのだわ、だから蜜汁の樣にお甘い月ッて云ふの、恐かないのよ』

『……だつてあの『涙』の雪江ね、あれ新婚旅行の途中で男に逃げられるわ』

『ほゝほそれは小説ぢやありませんか、あの神木さんの傑作の小説に書いてある事ぢやありませんか』

『だから妾恐いわ、神木さん屹度妾を欺して逃げるんだから……小説だつて左樣だもの』

『遣り切れないわ』

喜代子は煩さそうに横を向いて云つた、そして。

『逃げると思つたら捉まへて居たら可いわ、貴女確り神木さんを放さないやうに捉まへて被居いな、それなら途中で逃げる氣遣は無いから』

『捉まへて居たら可いの、斯して』

と引かれた手を持添へる。

『ほゝほ、そうして放さなかつたら神木さん逃げる事は出來はしない』

情ない顏をしながら喜代子は雛子と共に門前まで出た、馬車の扉は開かれて馬は鞭の影を待つ直也も出て來た。

『ぢや雛子さん、神木さんに御挨拶を爲さいよ送つて來て下さつたから』

『又被入い』

と直也は苦しいやうな顏をして云つた。

『……妾……神木さん逃げたら厭よ』

云ふかと思ふと雛子の白い肥つて手は不意に直也の袂を掴んでグッと引いた。

『何をするです』

直也は驚いて振放さうとする、喜代子はさつと其間に入つて。

『ほゝほ神木さん……ね……能ござんすわね先刻の事、ねね、それ御覽可いと仰有るでせう、ね雛子さん』

『だつて放したら神木さん逃げるから……』

『ほゝほそれはまだよ、それはね……それ旅行の時でせう、今ぢやないの、解つて、まだ捉まへるぢやないの』

雛子の容易に放さぬ手を除けると抱へ込む樣にして喜代子は馬車に乘つた、直也は餘りの馬鹿〳〵々々しさに思はず失笑つた馭者の口笛に馬は動く、白い手巾で喜代子が美しい富士額の汗を拭くのが見ゐた察して下さいといふ意味を表はした目と口との華やかな笑ひも見ゐた。

直也は忌々しさの本心に復つて、馬車の後影にべッと唾吐きかけ二階を仰ぐとさつさと内に入らうとする、此時道の向側なる堤の下からヌッと現れた姿がある。

『オイ榊待てッ、汝其醜態は何だッ』

（五二）

直也は雛子に袂を摑まれたよりも驚いた名を呼ぶ聲に振顧くと、罵しつた人は忘られぬ友宍戸良輔であつた。

『オ、宍戸か』

『榊ッ、汝が俺から隱れる理由を今日といふ今日は發見したぞ、汝ア實に怪しからん奴ぢや』

洋服姿の友は我が面前を壓して立つて、此友から斯な憤怒の聲を聞いた事は始めである……と思つた、直也は何か云かけて相手の詞に制せられた。

『この醜態ぢやア俺に遇ふ事は出來まい汝これア一体何といふ事をして居るのかッ』

『オイ大きい聲をするな、俺の身躰は秘密の中心ぢやから……』

『ナニ秘密の中心だ？、ヘン汚穢極まる罪惡の秘密だらう』

とそこらを睨め廻はして。

『文士の墮落を憤慨して居た汝は斯んなことをして良心に恥づるところはないか、此處は政治

界の黴菌のやうに云はれて正義の人々に蛇蝎視されてる佐藤信明の別莊ぢやないか、汝は斯な所で何を爲て居る……イヤ汝の爲て居る事は大概想像される……汝はツイ此間俺に對して何と云つた、あの招待會へ出席させたい爲に俺が勸めた詞を排けて巽伯爵の不德を罵つたぢやないか、其舌が乾かぬ中に巽元卿よりも奸物の世評がある佐藤信明の別莊に棲む？汝は僅た一人の友と云つたこの宍戸良輔を見事に欺瞞したな、巧く瞞着して居たな今日まで』

『宍戸……大きい聲をして呉れるな』

直也は別莊番の夫婦に聞れまいと奥に心を置く。

『大い聲をすれば他人に聞ゐて恥かしいといふのか、馬鹿ッ、汝が斯な醜態を演じて居る事は世間に既に知れてるぞ墮落の正體は文壇で看破されて居るのだ、唯知らんのは俺獨りだつた』

口惜しさうに身を寄せる良輔、直也の顏を凝と見据て。

『剛健な氣象を其儘に語る樣だつた髯を剃り落して……そ、その生々と墮落した面ア見るのも癪に觸るが……云ふだけの事を曝け出さんと俺ア皆に顏出しが出來ぬ、唯一の友として許す榊直也に限てそんな事は無いと云つて廣言吐いたこの俺は……』

『宍戸ッ、許して呉れ俺は榊直也ぢや無い神木朱衣だ、神木の俺がする事は暫時默つて許して呉れ……』

『ナニ神木朱衣だ……其假名で醜行を働くといふのか、名前は何でも可い以前の汝の精神に對して顧る點は無いか』

『……俺は今本名と共に良心も隱して居るのぢや、一切の我を沒して居るのぢや、時機が來たら判る、榊直也に復つた時始めて俺の眞相は判る、宍戸、俺は依然たる汝の友ぢや』

『はッはゝゝ、御都合の好い事を云ふな汝が依然たる友人の積でも俺は斷然今日限り汝と絕交するぞ』

『絕交……』

と直也は友の顏を見た。

『絕交して松岡先生を始め人々に不明を謝しなければ俺の面目は無いのだ……汝もそれが本望ぢやないか、又しても俺を遁れて隱れやうとする汝を今度は俺の方から棄てやるのだ』

『神木朱衣とは絕交して呉れ……榊直也には汝一人しか友は無いぢや……事情が判る迄そんな事を云はずに待つて呉れ……』

『事情々々といふが斯な墮落に何の事情がある？、折角文壇に占めかけた優良な地位を破壞して悔いない樣な大馬鹿者の汝に此上同情する俺ぢや無い』

『榊直也は斷じて汝に反かぬぞ』

『まだそんな曖昧な事を云つて俺を瞞着しやうといふのか……汝は何處まで腐つた性根だ……俺は先刻から彼處に隱れて今の醜態を見て居たのだぞ、喜代子の連れの婦人と汝はあの醜態を演じて、それでもまだ强辯しやうといふのか、非を飾つて俺を欺かうといふのかッ』

（五三）

宍戸は突かゝるやうにして云ひ捲つた。

『何だ榊ッ、これでも辨解をする事が出來るかッ』

『……』

『答へる事は出來んだらうが、醜態を見ろ醜態を……あゝ俺は汝に喰つてかゝりながらそれと同時に斯な情ない攻擊に對して何とも云ふ事が出來ないで空しく恥辱を含んで面を俯せる汝

が可愛相でならんのだぞ』

斷ちがたき友情は聲に逆しつた。

『汝は嘗て俺に對して斯な話をした事を忘れたか、両親に早く別れて繼母の手で育つた其繼母と汝の許嫁の婦人は共に汝を捨て富貴の人に走つた、この悲酸を嘗めた汝は女性といふものに對して强い反抗を抱くやうになつた……女には容易に許さぬ、と云つた事がある、何だ覺わがあるだらう、その汝こがれぢや……幾度も逆境に陷つていよいよ志を挫かぬ、敢然として時流に媚びないで確固たる信念を有て文藝に努力する……斯した汝の態度の男兒らしいのに俺に敬服したのだ、それが今思ふと悉く俺が欺かれて居たのだ、其當時から汝は友を賣つて居たのだ……斯云はれても汝辨解は出來ないだらうが』

直也は門の石柱に依つて其石の如く身動きもせなんだ。

『欺かれて居た俺は自分の不明を悔ゆるのみだが……汝の小說を描く技倆……天才の賞讃を博した著作上の名譽が斯る墮落に伴ふて空しく消わて行く……この文壇上の損害は汝の大罪だぞ……天才といふ自然の恩惠を亡ぼす罪は重大だぞ……』

『……』

『何も答へる事が出來んのかッ』

『答へる事は出來ん……神木朱衣といふ墮落文士は一言の答へも無い……榊直也の俺には辯解もある主張もある……それを或時機まで待つて呉れ、宍戸、頼むからそれまで待つて呉れ』

『待つ事は厭だ、辯解が出來ねば絶交だ、絶交を拒むのなら立派に俺の攻撃を打破つて見ろ』

『絶交は承諾せん……辯解は時機を待つて呉れ』

『ヤイ榊ッ……汝は俺がこれ程に……これ程に汝の事を思つて居る俺に對してそんな事を云ひ得る樣な奴だつたか……折角苦心して漸と見付つたと思ふと又隱れる……此處で汝を見たといふ奴があるから今日で三日續けて俺は偵察に出掛けて來て居るのだぞ……その俺に對して』

『宍戸……汝の友情に對して俺は秘密を開放しなければ濟んのだが……俺一個人に止まる事件ぢやない、公人私人の内面に于する重大な秘密ぢやから俺は何な事があつても決して口外はせぬ決心をして今或事業に着手しとるのぢや其事業は決して汝といふ友を恥かしめるものぢやないと信ずるから……自然に了解される時機まで万望待つて呉れそんな事を云はんと見て居つて呉れ』

『汝は眞實にそんな事を云ふのか』

と宍戸は直也の身躰と觸れるばかりに寄り進んで。

『眞に或秘密の爲に斯な事をして居ると云ふのか』

『左樣た、汝ばかりにはそれ迄云ふのぢやから……』

『ウム可し、それなら假にそれにして置くから其秘密を俺に語つて聞せて呉れ……秘密は秘密といふ事を語るに至つて既に秘密の價値なしぢや無いか、俺が汝の眞の友でなかつたら榊は秘密を有つて居るといふ事を漏らすだけで汝の秘密は破れるぢやないか、俺は汝の眞の事情が知りたいのだ、知つてその事情が汝に幸福なら力が添えたい、モシ不利益であれば何處までも反對する俺は友といふ意味を最善最美に發揮したいといふ考への他には何も無い、さあ榊、その秘密を聞う語つて呉れ』

直也は動かすことの出來ぬ宍戸の熱烈な友情に對して心を決した。

『宍戸、俺は或意味に於て活きた大作に着手しとるのぢや、汝の友情の前にそれを隱す事は遂に俺には出來なくなつた、來い、此方へ入れ、其小説を見せて遣らう』

男（續編）終

大正三年三月拾日印刷
大正三年三月十五日發行

定價金五十錢

著者　羽様荷香

大阪市南區毘谷仲之町
二百二十四番屋敷

發行者　樋口源次郎

大阪市西區立賣堀南通
二丁目五十四番地

印刷者　蒲田德之助

【男綴編輿附】

不許複製

發賣元　大阪市南區三休橋毘谷南へ入西側　樋口隆文館
（振替口座大阪八七九七）

◉樋口隆文館
營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版……及び其卸賣を專業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候

△卸賣目錄御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ

△樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さずに新版發行致べく候

△樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候

△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候若金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文には汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

樋口隆文館新刊小説

羽様荷香氏作		
○男命	全四冊	各一冊五十錢
○武士系	上中下	各一冊四十五錢
	全	各一冊四十五錢
島村抱月氏作		
○其の女	全	一冊五十錢
五竹圓氏作		
○香人形	上下	各一冊四十五錢
青峯氏作		
○女小説家	全	一冊五十錢
小島孤舟氏作		
○梅花錄	上下	各一冊四十五錢
○浪がら	上下	各一冊四十五錢
小川霞堤氏作		
○澄める心	全	一冊五十錢
○現代の女	上下	各一冊四十五錢
○女學生	上下	各一冊四十五錢

神戸又新日報記者

如鬼坊君作　歌川國松君畫

初編　鱗與之助

次編　乳守のお仙

終編　池沼鯉之助

木版極彩色艶麗

美人畫挿入

各一冊

實價　四十五錢

三冊同時に御注文の方は内地に限り送料不要

本篇は千里見透しといふ、摩訶幻妙、神奇不可思議の怪術を行ひし、鱗與之助の面白き一代記にして、事の發端は、古來神話的の怪傳説ある、印旛沼なる壺ヶ淵の怪物をば獲殺したるよりはじまり、續いて起る有趣味の事件には、あはれ無殘や花ならば、春よだ淺き未開の紅ともいふべき、容姿愛すべき佳麗の一處女が、山中無住の廢寺に於て、兇猛野獸の如き多數の强賊のために脅され、落花狼籍危機間一髪といふ、至極キワドイ艶場もある、編中に活動する人物には、勇士あり、孝子あり、義人あり、俠客あり、苦節の美人あり、亂倫の妖婦あり、起伏千變波瀾萬態、各有趣味の大活動をする、頗る面白き多人數向の小説にして、其文章は一種平易なる言文一致体なれば、講談物のみを讀んで居られる人にでもわかる至極通俗な面白き讀物なり。

476
447

終